

コロナ異変

ゆとり 満

一 コロナ無景

一日生きれば一日分死に近づく。長く生きれば生きるほど見送る人の数も増える。別離の悲しみや死の恐怖も増す。当然のことと言えば当然のことでありながらもその条理に素直には従えない。そんな思いに囚われる最近の東彦である。

東彦は七十九歳になる。小学生の頃まではあまり丈夫でなく、いわゆる虚弱児であった。風邪を引きやすく、胃腸も弱く、何よりも頭痛がひどかった。そのため母の友美の手を随分と煩わせ、心労も掛けた。特に十一歳、学齢でいうと小学校五年生の頃がピークで、出席日数より欠席日数

の方が多かったほどである。そのためであろうか、この年齢の頃のことはよく覚えていたのである。特に病に関してはその記憶は細部にわたっている。昭和二十八年のことである。

この頃の東彦は頭痛が始まると直に発熱し、火照った身体はけだるく統御できない別物のようになってしまう。押し寄せる波のようにズキン、ズキンと痛みが脳を襲う。それでも明るい昼間や家族が起きているうちはよい。家族から労りの声がかかったり、会話が聞こえたりして何かと気が紛れる。また、授業があるときは同じクラスの従兄弟の有樹が下校途中に寄って、給食のパンを届けてくれる。衛生のことを考えたとき、この行為は今では考えられないこ

とであった。が、給食は、当時の東彦の住む村落の児童たちにとつては貴重なエネルギー、また栄養補給のシステム

であったのである。教師たちはそれを熟知していた。従って欠席した子にせめてパンだけでも届けてやろうという慈悲心があったのだ。東彦にとつてさらに紙に包まれたパンは味気ないもので口にするには少なかつたが、パンを届けてくれる有樹の来訪は、病に伏せている東彦には何にも勝るものであった。時には他の級友二、三人が同行してくることもあった。十歳そこいらの男の子たちにとつて、病臥している級友との応対などは少しも楽しくはない。気を利かしてクラスでの出来事や授業の様子を聞かせようなどの才覚もまだ備わってはいない。本当は、玄関先で母親にパンを渡して直ぐにも帰りたいはずである。ところが、東彦の心中を察している友美は彼らを東彦の枕元に招き入れ、菓子やぶどう液を用意するのだ。ぶどう液とは、今で

情の発露でもあったのだ。

土地柄、多くの級友たちの家は豊かとは言えなかつた。何しろ、小学校五年生で新聞配達や納豆売りをしていた子がクラスに三、四人もいたのである。そんなわけでこのようなぶどう液の類いを口にする子は少なかつたのである。従って、友美のもてなしに子どもたちはころりと参ってしまふのであった。しかし、この液と菓子を口にし終えるとはやはり直ぐに退散するのが常であった。活力に満ちた子どもたちにとり、熱で火照って、ろくに会話もできない病人は手に余り、また感染するのではないかと恐ろしくもあつたのである。

友美は明るく世話好きな女性であつた。人が困っていると放つてはおけない質で、勢いそんな友美に人が集まつた。その中には味噌、醤油や米の無心、夫婦げんかの相談、怪我の手当の依頼など多々あつた。友美はそれらを少しも苦にせず面倒を見、相談にも乗っていた。また、料理が得意であつたので地域の寄り合いや催事などの料理番をよく依頼されていた。その依頼をいつも快く引き受けるのでとても重宝がられ、またありがたくも思われていた。

従って、友美を頼って訪れる人は多かつたのは当然の成り行きといえた。訪問者が多ければ東彦の病もあつという間に知れ渡る。そうすると産みだての鶏卵や山羊の乳など

の自家産物を持参し、見舞いに来る人もいる。それで四方山話に花を咲かせて帰る。当時、生卵は貴重品であった。友美の親切に対しこのような形で返す人もいたのである。この当時は、村内で誰かの家を尋ねる場合はその家の世帯主である男性の名を挙げる。ところが、東彦の家の場合には妻である友美を指し、「友ちゃんの家はどこっしや」と言われる方が多かった。

病の中にいる東彦にとり、このように人が訪れ、時間が目に見えて流れるのは救いであった。頭痛が治ることはなかったが、苦痛が少しは軽くなったことは確かであった。何よりも、人が醸し出す温もりを感じられるのが病人の孤独感を救ってくれた。こんな場面を幾度も体験するうちに、東彦は母親たちの会話にはリズムがあることに気づいた。内緒話は低く、それ以外は高く、時折オーケストラのドラムのように笑い声が抑揚や転調を促す。そして、話を終えて帰るときは来たときより明らかに朗らかであり、動作も軽やかになっている。襖戸一枚隔てて聞こえる女性たちの会話や微かな動作から東彦は、茶飲み話は「母親たちの鬱憤晴らしなんだ」と、子ども心にも得心をした。今風に表現すれば「ストレス解放の場」だったと言えるだろう。

茶飲み場は地域の情報収集や拡散の機能をも果たしていた。そして恐らく様々な脚色も成されていたことは容易にはなかった。彼は、死というものは自ら求めるものではなく、襲って来るものであるということを感じたのである。東彦にとり、死もあの世も絵空事ではなく、そして遙か彼方に在るものではなく、身近に遊泳しているようなものであった。その誘いは心身の弱まりに比例してその頻度も増えることをも知った。東彦にとって死とは常に戦うべき対象であった。

東彦が母から聞いた言葉に「他人の痛て痒いは三年も堪える」というのがある。病人の苦痛は余人にはなかなか知覚し得ない。それだけにいくらでも我慢できるというものである。逆に言うと、病人の辛さを表現している言葉といえる。

この言い伝えを病弱だった東彦は「病人の痛て痒いは三日が限度」と言い直した。しかし、病人がその限度が来たからと言って何か解決手段があるかという、全くないわけである。ただひたすらに耐え、病の癒えるのを祈るほかないのである。ただ、病人が救いと思うのは治癒の希望であり、そして温かな言葉である。

看病の「看」という漢字は「手」と「目」で構成されている。病人を看護するに「手(身体)」を動かすという看護動作、そして心遣いとか愛情という精神的な働きなす「目」という二つの働きが込められている漢字である。特

に領ける。現在はスマホやパソコンがその役割を果たしている。しかし、その原理は昔も今も変わらない。このような噂話やうつぶん晴らし、嫁や姑、そして夫たちへの不満を言い合う「おしゃべり」は人と人が交わりあう契機であり、スタートラインでもある。

東彦の苦痛あるいは恐怖は家族が寝静まってからやってくる。やってくるというより地からじわりと沁みだしてくるといふ表現が適切である。「病気は治るのか」という不安が彼の意識を覆い、次に「このまま治らずに死んでしまうのか」という恐怖が襲って来る。そして、死という言葉が彼の意識を支配していく。そんな時、夜のしじまを破るように蒸気機関車の汽笛が遠く、長く聞こえて来る。その汽笛はまるで奈落の底からの悲鳴のようであり、人の心魂をわしづかみにして地獄に引きずり込むようでもあった。東彦はその哀しい音に恐れ戦き、ただひたすらに身体を締め、祈り、夜の明けのを待つ。浅い眠りと目覚めが幾度も彼を襲い、それと同じように彼の意識も奈落と現実を行き交う。鶏が鳴き始め、新聞配達員の自転車の音、そして早出の人の足音が聞こえる暁、東彦はようやく救われ、病の恐怖から解き放たれる。それは「この世にやつと生還した」という安堵感でもあった。十一歳前後の少年がこのような死の恐怖を幾度も経験すると言うことは尋常なことでは

に「目は口ほどにものを言う」というように、目にはその人の感情が込められ、また表出される。自分の気持ちを手伝える働きを持つ。みるの「看」はただ見るのではなく心を持って看るといふのである。言い得て妙なる表現といえよう。

東彦は病という体験から、そして母の手厚い看護を通して病人にとっての大切な要件を体得したのである。

東彦は度重なる病が母親にどれほどの負担と心痛を掛けているかは子ども心にも十分に理解していた。また、一日母親と一緒に暮らせば家事の大変さも知る。

夜中、東彦が高熱にうなされたときには母が井戸水に浸した手ぬぐいを額に置いて冷やしてくれた。また、湿布もしてくれた。これは恐らく肺炎防止の一手段であったと思われる。寒い冬季は大変であった。まだガスコンロなどという便利なものはなかった。七輪に炭をおこして湯を沸かすのである。これだけでも身体は冷え切り、相当な負担が掛かる。沸かした湯にタオルを浸し、それを絞って胸に巻き付けてくれるのである。無償の愛という言葉があるが、勿論当時の東彦にはこの言葉は知らなかった。知らなかったが、母の愛というものがなんであるかということの間違はなく身体中に伝わった。

このような病に二月に一回は罹ってしまうのである。従

って体格は虚弱児の見本のようなものであった。海浜学校で東彦が級友と相撲を取っている写真が残っている。その写真を東彦は正視できない。あばら骨が洗濯板のように浮き出、四肢は骨に皮が被さっているだけというような状態である。頭だけが異様に大きく見えるのである。我が身でありながら東彦はその姿に羞恥心さえ覚えた。

現在でもそうであるように、当時の子どもたちにとって運動会や遠足は楽しみである。遠出することの少なかつた当時の子どもたちにとって、遠足は外界を知る絶好の機会でもあった。五年生の遠足は、芭蕉の「閑かさや岩にしみいる蟬の声」で有名な通称、山寺（公称宝珠山立石寺）であった。当時、仙台と山形を結ぶ国鉄仙山線にある山寺駅から下車七分で登山口の山門に着く。そこから一〇一五の石段を登って頂上の奥之院に着く。途中、山寺随一の絶景が拝める舞台造りで有名な五大堂を初め、大小およそ三十もの堂塔が点在する。しかし、子どもたちの目当てはそれではなかった。大滑り台であった。学校では子どもたちの口を通してその凄さが代々伝えられていた。それだけに期待感があふれていた。東彦たちもこの山寺の巨大滑り台で滑ることに胸をわくわくさせていた。

この山寺の滑り台は「昭和二十五年に観光ブームの煽りを受け、参拝客増加に対応するための『交通機関』として

かし、運動会は欠席せざるを得なかった。欠席と言うより「棄権」という言葉が当てはまる。彼は登校したが児童席で見学する羽目となったのである。そんなことなら自宅で休んでいた方がよいはずである。ところが当時の運動会は学校行事であると同時に地域（村）の一大行事でもあった。従って、外出禁止とか勤務の都合などで見学・応援できない者を除けば全員が学校に馳せ参じたのである。当然ながら、昼食はそれぞれの家庭がむしろなどを敷いて、母親たちが丹精込めて作り上げた料理に家族全員が舌鼓を打った。その料理には海苔巻き、いなり寿司、赤飯、卵焼きなどは欠かせない品であった。いわゆる定番の料理である。運動会の記憶はこの家庭料理と密接に繋がっている。娯楽の少なかつた当時としては、この運動会は家族イベントでもあったのだ。

東彦の家もそうであった。それ故に、一人自宅にいることができなかった。同級生たちが演技をしているとき、ひとりぼつんと児童席のむしろの上にいる東彦の写真が残っているが、その姿はいかにも屈辱的であった。病がもたらしたことであり東彦自身には落ち度がないのではあるが、しかし、彼の心の中は悔しさであふれ返っていた。病というものは身体を損ねるだけでなく、心にも打撃を与えることを東彦は身に沁みて感じたのだ。この日は熱も下が

建設された。全長約三百メートル、高低差一五〇メートルもあった。これは、参拝客に楽しく麓まで下つてもらおう意図であったとされる。しかし、滑り台の斜面角度が三十度ほどで加速がかなりきつく、参拝客が尻に火傷したりする事態が頻発するなど安全面で問題視され、結局、一九七〇年代の初めに廃止された。」

こんな危険な滑り台を遠足で滑らせたかという大いに疑問がある。東彦たちが遠足に行ったのは一九五三年（昭和二十八年）である。滑り台建設から四年が経過していた。もしかしたら学校は希望者のみを許可したのかもしれない。滑るときに寺側は敷物と靴カバーを貸してくれたらしい。東彦はその敷物が米俵の蓋であったと記憶している。このような具体的な記憶は経験しないとなかなか持てない。従って、東彦たちがこの地が遠足の目的地で、しかもこの滑り台を滑ったのは確かといって差し支えないだろう。

この年齢の男の子たちは、とにかく活動的で冒険心に富んでいた。それに加え先生たちも子どもたちの冒険心を許容するところがあった。ある程度の危険は知っていたと思われる。しかし、それを問題視することはなかったのだろう。子どもたちにとつても先生たちにとつても良い時代であった。

楽しみにしていた遠足は満喫できた東彦であった。し

り、復調しつつあったので登校し、見学したのである。

運動会の翌日、東彦の体温はまた上昇してしまった。外の風に長時間さらされた結果であることは明白であった。平熱より少し高いほどであったが、しかし、頭痛がひどかった。うんうんと唸って堪えている頭脳に、なぜか昨日の運動会の行進曲や進行のアナウンスの音が響いていた。障子越しに部屋に入り込む秋の日差しは輝くほどに明るく、代休で遊び戯れる近所の子どもたちの健康的な声が東彦の心をひどく痛めつけ、卑屈にさえした。

平癒の機会が全くといって見えないわが子の病状を目にした友美は、現代の医療では解決できないのではないかと危惧し始めていた。元々信心深いたちの友美であった。しかも、この時は藁にもすがる思いになっていた。友美が「やっぱりオガミヤさんに助けてもらおうか」と考えたのは自然の成り行きであった。「困った時の神頼み」が厳然と生きていたのである。

オガミヤさんとはイタコに似たものと言えば分かり易いだろう。霊媒師とか霊能者とも言える。イタコは、日本の東北地方の北部で口寄せを行う巫女（またはミコ）のことである。口寄せとは「生者または死者の霊や神霊を呼び寄せ、その意思を言葉で語る」。奄美・沖縄では「ゆた」と

呼ばれている。日本の巫女・巫者ふしの伝統は、「鬼道」を行つたと言われる卑弥呼以来、脈々と今日まで続いていると言える。呼称についても地域によって異なる。青森の恐山ではイタコ、旧仙台藩の領域（岩手県の南側約三分の一と宮城県）でオガミヤマ、山形県ではオナカマ、福島県ではミコヤマ、オガミヤと呼ばれている。東彦の先祖は代々仙台藩内在住の農民であったが、県の南部に位置し、福島県と隣接していたため福島県での呼称の影響下でオガミヤと呼び習わされていたものと思われる。

東彦はこのオガミヤさんの所には六歳の頃、祖母の祈禱と一緒に行った経験がある。茅葺の大きな家で祭壇は奥の間の一室であった。ロウソクが幾本も灯され、神棚の奥には円鏡が鈍く光っていた。オガミヤさんの服装は神社の巫女みこにそっくりであった。上衣は白い和服、下は赤い袴着であった。顔や手の皮膚は茶色に日に焼けていたのがひどく印象的で、それが記憶に残った。それもそうで、このオガミヤさんは普段は野良仕事もやっていたのであった。この時、祖母は何を依頼したのかは定かではない。しかし、東彦はこの異様な雰囲気恐怖を感じ泣き出し、同行していた母親に縋りついてしまった。

オガミヤさんは祖母が出した書付を手にとるとそれを広げ、何やら口の中でぶつぶつと唱えていた。そして、唱え幼い東彦はただ恐怖し、驚くばかりであった。そしてその光景は、強烈な印象となって彼の頭脳に刻み込んだのであった。それは昭和二十四年のまだ春遅い四月初めの頃であった。

オガミヤさんの祈禱がその頂点に達したとき、トランスに入る。この状態をシャーマニズムでは憑依と脱魂という。憑依現象は神霊・精霊がシャーマンの身体に入り込み、シャーマンの口を借りてメッセージを伝えるものである。イタコがその例である。それに対し、脱魂現象はシャーマンの霊魂が肉体から抜け出て霊界や天界で神や霊魂と接触、交流するものである。シャーマンによって、あるいはその地域によってどちらかを主に行っている。イタコのような「一流」のシャーマンになるためには相当の時間と修練を積み重ねなければならない。その伝から言えば、東彦が目にしたオガミヤさんとはとも一流とは言えなかった。

しかし、注目しておかねばならないことは、日本ではこのようなシャーマニズムや原始的宗教と言われるアニミズムが厳然と存在していたことである。それを未開的だとか時代遅れだということは当たらない。むしろ、文化の深さを思うべきである。縄文人が使ったと思われる言葉がアイヌ民族語、東北弁の中に、また沖縄の言葉に一部残っているという。また、縄文時代は神道につながる原始的宗教

終えるとその書付をうやうやしく祭壇に置いた。置くと半歩ほどあとずさりし、座布団の上に正座した。その座布団は、東彦の知っている座布団の大きさ、厚さ共に一、五倍ほどであった。「随分ふかふかの座布団だ」と、涙で汚れた目を半分ほど開けながら東彦は呟いた。

後に東彦が母に聞いたところ、祖母は、時折さし込みに見舞われることがあって、このオガミヤさんにしばしば通っていたという。この祖母のさし込みは胃がいれんか結石による痛みだったのかもしれない。

オガミヤさんはしばらく祝詞のような呪文を唱えていた。その唱え方が次第に速くなっていった。それにつれ、顔が紅潮し、そして目が吊り上がり、険しい表情になっていた。東彦は再び恐ろしさに襲われた。しかし、涙は出ず、声も出なかった。ただ、ひと母の腕を掴んでいた。頭頂から湯気が出るのではないかと思われるほどにオガミヤさんは没我状態になっていった。いわゆるトランス状態に陥ったのである。そして、祭壇に置いてあった笹竹を手にするや立ち上がった。そして、「えいつ」という掛け声を出しながら祖母の体、特に腹部の辺りをその笹竹で祓った。オガミヤさんは没我の境地で祖母の病魔を追い払おうとしたのである。祖母は手を合わせ、意味不明の言葉を発しながら祈っている。日常生活では一切見聞したことのない光景に、

（アニミズム）が信じられた。そこには自然崇拜という誠に貴重な概念がある。そこでは自然界を敬い、畏怖し、そして大事にしてきた。そればかりでなく、自然界に存在する動物（含む人間）、植物、そして無機物である路傍の石ころや川までも命があり、全て平等であるという考えを持っていた。その片鱗は今日まで日本人の心に息づいている。今日、人類の喫緊の課題である環境保護は、日本人の心情にぴたりと添うものと思われる。沖縄のユタも恐山のイタコもこの世とあの世の仲立ちや交信をする。このようなシャーマンは縄文時代にも存在していたかもしれない。そう考えると縄文時代と現代のつながりが感じられ、にわかには縄文が身近になる。そのつながりは自然崇拜である。明治生まれの祖母は、毎朝、日の出に向かって柏手を打ち、拝礼をしていた。農民である彼女は太陽こそが命の元であることを十分に承知していた。太陽への感謝と崇敬の念がこの毎朝の拝礼となっていたのである。恐らくこのような行動様式は縄文人も行っていたのではないかと推測される。

しかし、敗戦後、このような行為は前近代主義の悪しき遺習と批判されたり、嘲笑されたりした。東彦自身もそのような理解をし、「ばあちゃんはおろくせい」と批判をしていたものである。これは一例に過ぎないが、先祖が脈々

と伝えてきこのような多くの美風を私たちは惜しげもなく打ち捨ててきたり、破壊したりしてしまった。それは一度ならずも二度までもである。一つ目は明治初期の廃仏令、二つ目は戦後のアメリカナイズである。この令で、貴重な仏像のみならず漆器工芸品や浮世絵などあまたの芸術作品までもが当時の欧米人に買いたたかれ、海外へ流出した。このような廃仏毀釈という非文明的な行動は何も日本だけの話ではない。遠くは秦の始皇帝の焚書坑儒、近くては文化大革命やアフガン、ミャンマー軍の仏像、寺院の破壊など数えればキリがないほどである。為政者を選び間違えるとともにないことになるのは歴史が教えることでもある。

東彦の母友美は、東彦の生年月日と氏名を書き付けた紙片と普段着の上衣を風呂敷に丁寧に包み、家を出た。本来なら悪魔祓いをしてもらう東彦が同行しなければならなかった。しかし、東彦の容体はなかなかよくなかった。これ以上悪化させてはならないと、友美は東彦を同行しなかったのである。その代わり着衣を持参することになった。着衣は体臭が残っていればいれるほど透視能力も上がるという。友美は、臥せている東彦から下着を脱がせた。さすがに汗で臭いが強くなっていたが、友美は「これがよい」と満足した。

東彦は内心では母と同行しないことを喜んでいた。祖母上の頭を反対側に曲げた。

「まだ気分よくなんねえのが。すかたねえな。でもすぐよくなるぞ。オガミヤさんが自信満々にうげ負って（請け負う）くれたがらな」

友美は東彦の不満気な気分なぞ少しもお構いなしで、自分の言いたいことを一方的に話すのであった。

時に、自己中心的な話しぶりになってしまふ母親の性行については、東彦は十分に承知していた。まして母親の遅い帰宅に不満でへそを曲げているなどとはとても言えないことは、十歳の東彦にも十分理解できていた。

「それでオガミヤさんはなんて言ったのっしや」

東彦は頭を曲げたままぶつきらぼうに言い返した。

「それがな、」

友美はさも自分の手柄のように弾んだ声で続けた。

「玄関か、物置の入口の鴨居に五寸釘が刺さっている。それが息子の頭に悪さをしている原因だ。直ぐに抜いて、塩を振って清めでおげばたちまちよくなる」

そうオガミヤマは言ったというのである。

「それで釘はあったの」

東彦は母親の得意げな話に真実みがあるように思えた。そして、頭を回転して母親の顔を見た。

「ああ、あった、あったわさ。玄関に一本、物置には三本

の神降しの場面を思い出し、少し気分が悪くなってきたからだだった。忘れていたのだがどうやら東彦はトラウマにかかってしまったようであった。しかし、他方で、オガミヤさんがどんな託宣を下すかに大きな期待を持ってもいたのであった。

今回の母親の願いはもちろん東彦の頭痛を取り払ってもらうことであった。このオガミヤさんは東彦が以前に見知った人と同人であった。あれから六年ほど経っていた。

臥して待つ東彦には時間の経過がいつもより随分と遅く感じられた。頭痛のひどさが増していくようであった。そして、その痛さの合間合間に虚弱な己の肉体をひどく呪った。段々に母の遅さを憎む気持ちが強くなっていった。悶々としているうちにようやく母が帰宅した。東彦は喜びが込み上がってきた。

玄関の戸がガラガラと音を立てるのが聞こえてきた。つづいて母の「ただ今」という声があった。その声は明るかった。だが、東彦はその声に不機嫌になった。

「随分遅がったごと」

東彦の言葉には棘があった。

「東彦、喜べ。おめえの頭やみの原因が分かったぞ」

友美は東彦の気持ちなどお構いなしだった。

東彦は母親の言葉なぞさも耳に届かないかのように枕の

も刺さってあったよ」

「ほんで、もう抜いたの」

「いや、まだだべつちや。まず東彦にこのいいニュースを少しでも早くって思っ、こうすて話しているんだべ」

さすがに東彦は母親のまごころに心打たれてしまった。

そんな母にむつけた（すねる、ふくれっ面をする）ふりをして申し訳ないと思った。

「そんならば、かあちゃん、早く釘抜いて」

「わがった わがった。今すぐに抜いでくるから」

友美はそういうなり部屋を出て行った。

しかし、冷静になって考えると、どこの家でも柱や鴨居に五寸釘の二、三本は刺してあるのはだれでも分かることであった。農家となればなおさらで家のそこらじゅうに釘が刺さっていた。

案の定というか、当然の結果というか東彦の頭痛はその後も二三日続いた。四日目には頭痛は消えたが、それがオガミヤさんの祈禱の効果なのか自然治癒なのか判然としなかった。母親はオガミヤさんの霊験と信じ、東彦は疑いのまま目を過ごした。しかし、その後一月ばかり後に、東彦

はまた頭痛で臥せてしまった。このことは東彦がオガミヤさんに抱いた偽物という疑念を明らかにしてしまった。母親もさすがにばつが悪そうであった。そして、それ以来、

オガミヤさんの言葉は二人の間にはひとことも話題にならなくなった。

ところがその宿痾ともいべき頭痛が掻き消える日が起こったのである。

当時、東彦の掛かり付けのお医者さんは松川先生이었다。先生は仙台市長町の宮城第二病院の勤務医であったが独立し、その病院の近くに開業した。東彦の家はその医院から徒歩で三十分ほどの所であった。現在のように医院が患者で溢れるというようなことはなかった。従って松川先生は他のお医者さん同様往診も行っていた。先生はバイクで患者の家を回っていた。当時、バイクは珍しかった。何しろまだ馬車やリヤカーが幅を利かしていた時代であった。バイクを目にした子どもたちは直ぐにその後を追いかけるほどであった。子どもたちにバイクが人気だったのには訳があった。週一回ほど巡って来る紙芝居に「少年蛇太郎」という物語があった。蛇太郎はあだ名で本名は太郎であった。太郎少年は何か危機が迫ったり、救助を求められる事態が出来るとバイクで駆けつけるのである。そして、バイクのスピードが増すごとに少年は変身して蛇となり、悪人を縦横無尽にやっつけてしまうのである。時折、風防メガネをかけ白衣をたなびかせて走る先生に、子どもたちは

注射をする前に身体の筋肉をほぐすからね。私の言うとおりにして」
そして、先生は説明を続けた。
「鼻からゆっくりと息を吸い、そしてその息をさらにゆっくりと口から吐きなさい」

先生はそのとおりのことをやるように言い、東彦はその言葉に従った。「うまい、うまい。東彦は覚えが早い」と、先生は褒めた。そして同じことを三回やるように指示をした。褒められた東彦はその言葉に大きく頷き、生真面目に深呼吸を繰り返した。

先生は「こんなに上手にやれた子はなかったよ」と言いながら東彦の頭を撫でた。先生の手は東彦の母の手よりも白く、柔らかであった。そして、温かであった。東彦は「松川先生は心ばかりか手まで優しい」と感心した。

次に先生は東彦に裸になるように指示した。東彦は恥ずかしく思う前に「注射をするのにどうして裸にならなければいけないのか」と不審に思ったが、先生の言うことには間違いないと、寝間着の帯ひもに手を掛けた。しかし、次の動作にはなかなか移れなかった。それを見て取った先生は「かあちゃん、脱ぐのを手伝って」と、母に言った。母は東彦の寝間着の帯ひもを取り、ついで肩から寝間着を外した。寝間着はストンと身体から滑り足元に落ち、もつ

蛇太郎少年を重ねて見て興奮していたのであった。それだけで少年たちの先生に対する人気は高かった。

東彦の育った地域は東北本線長町駅、そしてそれに続く広大な操車場の東側に沿って広がっていた。線路と住宅の間は工場地帯が延び、住宅地の東外れから太平洋の海岸まで十数^キも続く田園が広がっていた。そのような地域環境もあって、先生のバイクの荷台には時折、ダイコンやネギなどの野菜がくくられていた。それは農民が持つ善意の表れとも言えたが、何よりも松川先生の医師としての技量、そしてその人格に対する敬意の表れであった。先生は請われると、例え真夜中でも往診に応じてくれた。

先生は東彦の頭痛の病根を何かの病原菌か脳の異常によるものではなく、器質的な要因によるものと見立てた。「そのうちにその頭痛を退治してやるからもう少しの間我慢しなさい」と、東彦に言い聞かせていた。

運動会から二ヶ月ほどの後、その約束の日が本当にやってきたのだ。東彦は頭の中に神経のように根を張っている頭痛という物の怪がきれいさっぱりと除去される期待と、他方で失敗してその物の怪が体中にその根を張り巡らす恐怖とで身体が細かく震えていた。

先生は東彦が臥せている側に来た。
「今日は注射をするからね。あまり心配することはないよ。

さりとひとかたまりとなった。汗臭い匂いが足元から立ち上って来た。東彦の身体がブルンと震えた。母親は東彦の腰回りのパンツに両の手を掛けると苦もなくパンツを引き落とした。
「膝と肘をうつつぶせになりなさい」

東彦は先生の指示通りに従った。不思議なことに丸裸な自分の姿が少しも恥ずかしくなかった。ただ骨の浮き立つ身体に引け目を感じた。
「上手にできたね」

先生は東彦のうつぶせの姿を褒めてくれた。そのことがとてもうれしく、思わず「先生、後はどうしたらいいんですか」と、問うたほどであった。

「東彦くんは五年生だったね。君はなかなかかしっかりしている。少しも怖がらず、それどころか次の指示を待つのだから。かあちゃんが上手に育ててくれてるんだね」

「先生、そんなと言われたの初めてだっす。おしよすいわ（恥ずかしい）」

東彦は母の田舎弁が恥ずかしかった。

「ほんなごねえべっちゃ。良いかあちゃんだよ」

先生は母に合わせて仙台弁で返した。

東彦は先生も仙台弁を話すのだと驚いた。と同時に、安心もした。

「次はだな東彦くん、背中を丸めてくれないか。後ろの足の膝を揃えてちよっと前に進んで。そうそう、うまい、うまい」

先生は東彦の動作に合わせて褒めてくれる。褒められることの少ない東彦はうれしくて仕方がない。頭痛も消えそうであった。

「今度は前に進めた膝をしっかり止めて。そして次は両肘を少し後ろに下げて。腰が上がるだろう。そう、そしてその状態のまま、できるだけ背中を丸めてくれない。腰の曲がったエビみたいになって。あつ、かあちゃん東彦くんの腰をしっかり押さえて。そうそう、かあちゃんもうまいね」

母親は無言であった。しかし、東彦の腰を押さえる母の力がぐつと強くなったのを東彦は感じとった。その力の半分は松川先生の褒め言葉によるものだったに違いない。母は他人に褒められるということは東彦以上に少なかったはずである。褒められたうれしさは手の力となって表れたのだろう。

「この姿勢をしっかりと確保してね。これから注射器で背骨の中の髄液を吸い出すからね。東彦くんの髄液は他の人よりちよっと多いんだ。この多い髄液が頭の神経を刺激している訳なんだ。それで頭痛が起きている。ヤカンに水を

の注射は薬を体に注ぎ込むのではなく体の悪い液を吸い出すための注射だから痛みはずっと少ない。そのはずだ」

「そのはずだ」という言葉は東彦には届いていなかった。ただ「太い注射器の方が痛みが少ない」という言葉だけが東彦の聴覚にはしっかり残った。

松川医師は東彦の恐怖心を少しでも軽くしてやろうと一種の陽動作戦を用いたのだ。言葉のトリックのである。「鋭い」と「鈍い」。「注入」と「吸い出す」と対照させて痛みが少ないことを明示したのである。本来、注入しようが吸収しようが注射針を肉体に刺す痛みが変わりがあるはずがない。しかし、感情は違う。言葉ひとつで恐怖が消えることもあるのだ。この場合はまさにその例であった。

東彦の感情はうまうまと医師のトリックに引つ掛かったのである。その上、尊敬して止まない先生の言葉である。震えはびたりと止まった。東彦は先生がまるで魔法使いでもあるかのように思った。しかし、この先生の言葉は東彦の恐怖心を抑えるためのものだった。

額を敷き布団に着け膝を折り、尻を持ち上げた姿勢はなかなか苦しいものであった。松川医師はその姿勢の背骨当たりには消毒薬を塗った。ブンというクレゾール液特有の匂いが部屋に広がった。次に、医師は東彦に先程の呼吸法を行うように指示した。特に息をゆつくりと吐くようにと

いっぱいに入れて湧かせば直ぐにフタが持ち上がるだろう。ヤカンの中の水が髄液で、フタが頭だ。沸いたお湯が頭であるフタを刺激しているんだよ。東彦くんこの理屈分かるかね」

東彦は頭を上下にコクリとした。先生の説明は五年生の東彦にもよく理解できた。「凄いい先生だ」と東彦は感心した。子どもでも理解できれば恐怖心は減退するのだ。先生はそんな子どもの心理をよく把握していたのだ。

髄液の吸引の際の患者の姿勢は横臥にし、体を海老のよう丸めるのが一般的らしいが、東彦は俯せの姿勢をとられた。ベッドと違い敷布団に臥せている患者の場合は俯せの姿勢の方が注射をし易いからだろう。

東彦は先生の言葉に軽く頷いた。うつぶせの状態では大きくは頷けなかったからである。

東彦は先生が並べた箱から取り出した注射器をちらりと見た。頭を動かさず目だけ動かしての動作であった。十分に視野には入れることはできなかったがその大きさにびっくりしてしまった。まるでキュウリみたいな太さであった。途端に東彦の腕が細かく震えだして来た。

「東彦くん、背骨に注射器を刺すとき、細い針の注射器は鋭いためより痛いんだ。逆に太い方は、針先が鈍いので痛みは少ないんだ。だから安心していいよ。しかもね、今日

言った。東彦は指示されたとおりに息を大きく吸い、そしてゆつくりと吐いた。肺の中の空気が三分の一ほどになったときであった。突然背骨の真ん中に衝撃が走った。東彦の喉の奥からグアツというヒキガエルがひきつづされた時のような悲鳴がほとぼり出た。同時に東彦は敷き布団の上のシーツを思いつきり握りしめた。

「東彦、おまえは肝っ玉が太いわらすだろう。痛いだろうけどちよっとの間我慢するんだ」

松川医師は叫ぶように東彦に声を掛けた。

先生の「肝っ玉の太いわらす」という言葉に東彦はしきつとなった。そして「泣くもんか」と心の中で応え、ぎしりと奥歯を噛みしめた。しかし、堪えきれずに涙がひとしずくポタリとシーツの上に落ちた。そしてそのしずくは見る間に広がっていった。

松川医師は腰椎の脊椎管に注射針を狙い定めるとドンと射し込んだのだ。生体は異物が入り込もうとするとそれを阻止し、排除するため筋肉が収縮する。その収縮に負けてはならないのだ。しかも、万一狙いが狂って注射針が脊椎骨や神経を傷つけたならば大変なことになる。松川医師は東彦以上に緊張していたのだ。注射針は一瞬、抵抗を受けた。しかし、その後、針は吸い込まれるように脊椎の中に入った。医師はほっとした。しかし、「まだだ、気を

緩めるな」と自問すると慎重に髄液を吸い上げた。注射器のメモリを数えながら髄液の量を慎重に見極めると注射器を持つ右手を止めた。そして、ほんのわずかに注射器を抜き止めるや、次の瞬間、一気に引き抜いた。

注射器が引き抜かれた瞬間、東彦の体は敷いた風呂敷が真ん中から持ち上げられるように浮いたように思った。その後に注射を打った箇所が猛烈な痛みで襲われ、ついで火口の溶岩にでも襲われたような熱さがきりきりと肉と骨を痛めつけてきた。そして次に、全身の力が一度に失せたようになり、体をべたりと布団の上に広げてしまった。まるで脱力したアメンボのようであった。しかし、全身に広がる痛みの中には希望のようなものが感じられた。「この痛みは健康への儀式かも知れない」。そんな思いが東彦の脳裏を掠めた。

「東彦、よく頑張ったな。終わったぞ」

松川医師の声が弾んでいた。恐らく「頑張ったな」という声の半分は自分自身にも言い聞かせていたのかも知れない。

しかし、東彦は「はい」という返事をしたつもりであったが声にはならなかった。ゼイゼイという荒い呼吸をしているだけであった。しかし、直にその呼吸も次第に収まっていった。痛みもわずかであるが少なくなったようである。

友美は居間のテーブルの下に置いてある座布団を引っ繰り返して置き直すと、その表面を軽く叩き医師を招いた。

松川医師は東彦の頭を撫でた。

「東彦、おまえは本当に我慢強い子だな。その我慢強さはこれからいろんなことに役立つからな。自信を持って生きていくんだぞ」

そう言いながら立ち上がると居間に移った。

松川先生はしばらく母親と話をしていた。その中で「先生、細い注射器と太い注射器では太い方が痛くないって本当ですか」という母親の低い声が聞こえた。このことは、布団に入って落ち着いてきた頃に最初に浮かんだ東彦の疑問でもあった。東彦は母親も同じ疑問を持ったのだと妙に感心してしまった。そして、先生がなんて答えるか耳をそばだてた。

「実はなかあちゃん、東彦のことを見込んで逆のことを言ったんだよ。太い針より細い針の方が痛くないなんて誰も信じる人はいない。物の道理だよ。嘘も方便と言うことがあるね。東彦の痛みへの恐怖心を少しでも和らげるために嘘をついてしまった。医者か嘘をつくなんて子どもには一番いけないことだが、万やむを得なかっただよ。東彦、分かってくれるかな」

松川先生は最後の言葉を大きく言った。東彦にもはつき

「先生は痛くねえと言ったけど嘘だつべえ。こんな痛えこと初めてだ。先生にだまされた」

東彦はそう思った。しかし、だからといって先生を憎むとか嘘つきなどと文句を言う気持ちには少しもなれなかった。

「かあちゃん、うまくいったぞ。東彦もよく堪えた」

「先生本当にありがとうございます。なんてお礼を申し上げたらよいか」

母親は医師に向かった手を合わせていた。その合わせた手の裏から嗚咽が漏れていた。

母親は涙を拭く間もなく廊下に置いた水の入った洗面器と手ぬぐいを医師の側に置いた。

「先生どうぞ使ってください」

そう言いながら手で進めた。母親の声にもはやくぐもりはなかった。喜びの感情がはつきりと表れていた。

「かあちゃん、まず東彦に布団を掛けて上げて。少しの間体を横にし、手足を折って楽にしているといいよ。まあ、間違いはないと思うが、念のためしばらく様子を見てから失礼するから」

「先生にそこまでしていただいても構いません。それならばどうぞ居間の方に移ってください。なんにもおもてなしできませんが、お茶つこだけでも用意しますから」

り聞こえた。そしてなぜか先生の言葉に涙がこぼれた。松川医師の優しさが体に染みていった。そして「いい先生だ」と口の中でつぶやいた。体から余計な力がすうっと抜けていくのが分かった。

「そうですが。先生のご配慮があったから東彦もそれほどおんかなく(怖い)注射を受けることができたんですね。ありがたいことです」

襖一枚の向こうで母親が深々と頭を下げている様子が東彦にも窺い知れた。

「どれ、我慢強い患者さんの顔をもう一度見て帰ろうか」

その声が終わるか終わらないうちに襖戸がすつと開いて、松川医師の顔が東彦をのぞき込んで来た。横に臥していた東彦は顔を横にねじ上げ先生の顔を見上げた。太く黒い縁の眼鏡の奥の目が和んでいた。

「先生ありがとうございます。先生のお陰でそんなに痛くありませんでした」

東彦は苦しい姿勢から絞り出すような声で先生に礼を言った。

「そうか、痛みは少なかったか、それを聞いて私もうれしいよ」

「それに段々楽になっていくみたいですよ」
東彦の声は少し弾んでいた。

「楽になって来たって。それなら安心だ。心配はない。ところで東彦くん、君はなかなか肝の座った子だ。今日のことは忘れるんじゃないよ。苦しいことに出会ったら今日の痛さを思い出すんだ。そうすれば何事も必ず乗り越えることができる。これをナニクソ精神と言うんだ」

松川医師はアハハと笑いながら帰っていった。玄関を出るときに医師は母親に「検査結果は三日後には分かるから医院に聞きに来て。髄液はきれいだったからかあちゃんは心配しなくていいよ」

その先生の声が消えると直にバイクのバンと言う音がした。そして、ドドツという力強い排気音を立て走り去っていった。

その音が消えかかるころ東彦は先生の先程の言葉を思い出した。そして「ナニクソ精神か、なかなかいい言葉だ」と東彦は思った。

見送りに出た母親が戻って来た。

「松川先生は本当に立派な先生だね。東彦がこういう先生と巡り合えたのは幸せなことだ。カミサマに感謝しなくっちゃね」

そして、柵棚に向かって手を合わせ、拍手を打った。

注射の痛みが消えるに比例して頭痛もまるで薄皮を剥ぐようにして消えていった。それにつれ、脳の透明度が増し

ていった。これまで経験したことのないクリーンさであった。まるで快晴の秋空のように奥の奥まで透き通っているような感じであった。そして、「世の中はこんなに清らかで澄み切っていたんだ」と、東彦はしみじみと思った。

往診から三日後、母親の友美は検査結果を聞きに松川医院を訪れた。松川医師が帰りがけに「心配ない」と言ったとおりの結果であった。友美は行ききの不安もきれいに去り、軽ろやかな足取りで帰途についた。途中、パンの製造販売をしている蜡屋に寄り、クリームパンとジャムパンをそれぞれ家族分六個ずつ買った。クリームパンは東彦の好物でもあった。友美は家族の喜ぶ笑顔を思い浮かべ、幸せな気分になった。

この日以降、東彦の頭痛はまるで真空掃除機に吸い取られたように掻き消え、二度と発症することはなかった。東彦の体格は相変わらず「痩せトリガラ」ではあったが、他の子どもたちと同様に活発に体を動かすことができるようになったのである。

当時、東彦の村落には医師はいなかった。松川医師の前には只野医師が隣の長町に開院していた。やはり、堀田医師同様村落の住民に対し往診をしてくれていた。ところが只野医師は患者に対する対応が極めて乱暴であり、言葉

遣いも横柄であった。この頃の村民は医師に対しては皆大変な敬意を払っていた。高齢者の多くは「〇〇先生様」と二重敬語を使っていた。しかし、只野医師に対しては陰で「軍医上がり」と蔑称していたのである。

戦場での医師は、患者や緊急処置の多さから患者への対応は勢い手荒になってしまう。また、処置もおおざっぱになりがちである。こんなことから対応や処置の手荒な医師を「軍医上がり」と称したのである。もちろん、これは多くの場合、患者側の勘違いや偏見であった。

村民が最も嫌がったのは注射をされることだった。只野医師の太い手で腕をつかまれるやどんなに泣いても叫んでもまるで大根に竹串を指すかのようにずぶりと注射器を差し込む。患者である子どもは恐怖から筋肉が収縮し固まっている。その結果、痛みも倍増してしまうのである。そんな訳で手荒なこの医師の対応を子どもならずとも成人まで嫌がった。しかも、親の言うことを聞かない子たちを注意する手段として「そんな悪い子だば只野先生にぶつとい注射してもらうからな」という一言まで出来上がったほどであった。只野医師にしてみればありがた迷惑もいところだったに違いない。村民の過剰とも言える対応は、只野医師の前に往診していた堀田医師との違いも影響していた。堀田医師は慈悲深い方で、まるで「仏様」のようだ村民

は慕っていた。医師は村落から自転車で一時間ほどの所に開院していた。遠距離にありながらも医師は昼夜を分かたず往診してくれた。そして、その対応もいかにも柔らかでいつも笑顔を含んだような口調であった。

ところが只野医師は堀田医師とはあまりにも違いが大きすぎた。このころ「民主主義」という言葉が多くの人の口の端に上るほどで、いわばブームになっていた。このブームの言葉を遣い「只野医者は民主主義じゃない」とも言われていた。他方「軍医上がりだから仕方ねえべ」と諦める人もいた。

東彦の父親は仏の堀田先生の往診によって一命を取り留めた一人であった。ある夜、時刻は十時ごろであった。病気とは無縁な父親が急に腹痛を起こしたのである。後で聞いたところによると、二日ほど前から痛みがあったのだという。そしてこの夜から痛みが強まり、しかも少しも止まることなくひどくなっていく一方であった。尋常ではないと悟った母が、近くの実家に行き電話を借り、往診依頼をしたのだ。先生は既に就寝していたがすぐに駆け付けるとの返事をくれた。動物のような唸り声を上げて苦しむ父親に東彦は正視することができず、また、少しでも早く堀田医師の姿を見たさに外に出て堀田先生を待った。東北の十一月の初旬の夜であった。外は寒く、時間の経過とともに体

がガタガタ震えだして来た。子どもでもこんな時には物事を悪い方向に考えてしまうのだった。どうしても父の死のことが頭の中に広がっていくのであった。もし、そのような事態になったならば無職の母親と幼い四人の子どもたちは直ちに路頭に迷ってしまう。そう考えると寒さなど問題ではなかった。そしてひたすら堀田医師の来るのを待ち続けた。こういう時は時間の流れは遅く、じりじりとした思っただけが強くなるのだった。

堀田医師が東彦宅に見えたのは真夜中の十二時に近かった。東彦は闇の中にぼつりとした灯が次第に近づき、それにつれて自転車のガタガタという音が大きくなってくるのを聞き、ほつとした。体はすっかり冷え切ってしまった。診察した医師はすぐに虫垂炎と見立て、痛め止めと化膿止めの注射をしてくれた。

「明日、直ぐに鉄道病院に行くように。もう少し遅かったら命が危なかったな。これからも何かあったら遠慮しないで連絡をよこすんだよ」

医師は手を洗いながら母親に話していた。

「先生、本当にありがとうございます」

彼女は額を畳にくつつくほど下げ、お礼を言った。

「先生、誠にありがとうございます」

先ほどまで痛みに耐えかねて唸り声を上げていた父親も

ゆつくりと低い声で礼を言った。

「なめに医者か病人を助けるのは農民が畑に種をまくと同じさ。当たり前のことさ。気にしなくていいよ」

医師は母親が出した手拭いで手を拭きながら柔らかな表情でそう言った。

医師の姿が消えてもキーコ、キーコというくたびれた自転車の音が暗闇の中にしばらく聞こえた。翌日、父親は堀田医師の指示通り、直ぐに鉄道病院にリヤカーで運びこまれた。当時、父親は国鉄の蒸気機関士であった。その関連で鉄道病院に入院したのである。こうして東彦の父は一命を取り留めた。

堀田医師は、引退間近の頃、村の老人たちを秋保温泉に招待してくれたことがあった。これを聞いた当時、小学校三年生だった東彦は、子ども心にも「話があべこべだ」と思った。患者が世話になった医師を招待する話ならだれも驚かない。ところが堀田医師は世話をした患者を温泉に招待のである。

秋保温泉は、現在のJR仙台駅から車で四十分ほどの距離にある。古墳時代から「名取の御湯」と称され、別所温泉、野沢温泉と共に「日本三御湯」として知られている。また、伊達政宗も秋保の湯を愛し、伊達家の入湯場として代々大切に守られて来た経緯がある。

東彦にもこの温泉場はなじみであった。農閑期になると近隣の農民たちの湯治場としても愛用されていた。愛用された要因にはアクセスの良さも挙げられる。国鉄長町駅至近から秋保電鉄が秋保まで運行していた。一両だけの「チンチン電車」であった。そんな訳で東彦も幼いころより祖母に連れて行かれ、この温泉場で過ごした。米、味噌、漬物、野菜などは持参である。持参と言っても若い衆が湯治場まで運んでくれるのだ。また、途中で米、味噌などが足りなくなれば連絡して届けてもらう。魚や納豆などは行商が売りに来る。農民たちの懐具合に応じたうまい仕組みであった。東彦も長じてから帰省する度に家族を連れてここに宿泊をした。その頃は自炊の湯治場という旅館はなくなつてはいたが、そのシステムは東彦には懐かしく思われた。

秋保温泉は極めて大衆的な温泉場でもあった。恐らく宿泊代もそれほど高くはなかったと思われる。とは言え、二十人を超す人々を一人の財布からもてなすことは易々とできることではない。今となって堀田先生の意図を知ることにはできないが、恐らく先生は村落の老人たちの純朴な心情を愛していたのではなかったかと思う。医師という立場を離れ、この純朴な老人たちと一夜ゆつくりと過ごしかつたのだろうと推測する。

ではないかと思う。湯治でよく知っていた温泉場ではあったが、ほとんどの者にとり「上げ膳据え膳」の待遇での宿泊は初めてのことだった。その晩の宴会はさぞかし賑やかで楽しいものであったに違いない。三味線が弾ける者は三味線を、笛を吹ける者は笛を持参したろう。村には歌や踊りが上手なものが必ずいる。その晩はさんさ時雨や長持ち歌、また大漁唄い込みなどの地元の民謡が幾度も歌われ、それに合わせて踊りを踊る者も多かっただろう。東彦にはその光景が容易に目に浮かぶのである。

東彦は只野医師を診察費無料の「タダノ先生」と長いこと思っていた。後年その間違いを知り愚かしくも思い、笑いもした。慈愛に満ちた堀田医師の後に来た只野先生は運が悪かったのかもしれない。

二 コロナ妖変

東彦は二〇二三年秋に八十歳を迎える。まさか自分がこの年齢を迎えられるとは信じられない。しかも、八十という年月の重さが実感できない。十分な老人ではあるのだが、それにふさわしい知恵とか重々しさ、にじみ出る風格などが微塵もない。「ない」と断言するとあまりにも気の毒である。「感じられない」と婉曲に言おう。それでもただ計

数的な軽みと蟬の抜け殻のような重さしかない、と思われる。哀れささえ感じる。

東彦は退職から二年の後、学習の遅れや不登校の子どもたちの居場所として「学習支援センター」を立ち上げた。対象の子どもは小学生から中学生までで、常時七、八名が在籍していた。場所は親友のA氏が提供してくれた。彼の不動産事務所ビルの五階である。東彦の自宅から七キロほどの距離がある。東彦は自転車を通っている。七月から九月初旬ごろまでは炎暑、そして一月から三月初旬までは寒さ、さらに丹沢おろしの悲風が最大の難敵である。しかし、東彦は今までにこの難敵をもとめせず克服してきた。幸いしているのは電動補助自転車である。上り坂で苦勞することはまるでない。ただ維持管理費が意外とかかる。タイヤのパンク、バッテリーの老化や自転車そのものの劣化による買い替えは現在の東彦の懐具合からすれば大きな出費である。

しかし、こんな些事を凌駕する東彦の自慢話がある。寒風も炎暑も時には雨さえものともせず仕事場と自宅を往復していることである。特に寒風を颯爽と切り裂いてペダルを漕ぐ己に密かに誇りを持っている。そこには東北もんの意地が潜んでいるのかもしれない。しかし、他者からの認知なくしては誇りも自尊心も成立不可能である。東彦は

生協特売のフグ鍋も二度食べさせたことがあるぞ」とつぶやいた。しかし、そんなつぶやきなど興奮のつぼにある豚児たちには聞こえない。

「よし、分かった。これからは年取の日（大晦日に去る年に感謝し、新年を迎えるための宴。また年をとる祝い）はカニ食べ放題にする。よってこれからの年取はカニパーティーと名付ける」

東彦は大見得を切ったのである。こんなことで父親の尊厳が保たれ、権威が上昇したとはとても思われない。しかし、東彦はこの「大胆な提案」を密かに誇らしく思ったのである。

この年取は日本伝統の行事である。東彦の生地仙台でも広く行われていた。東彦は結婚してからもこの伝統を忠実に引き継いでいたのである。

「お父さん、太っ腹」

娘は満面の笑顔である。

「親父、約束はきちんと守ってよ」

疑い深い長男はやや懐疑的である。

「僕はどっちかというフグがいいな」

長男より八歳下で純情な次男はなんのてらいもない。

「それいいわね。私も賛成よ」

金銭感覚に疎い妻は平然として「やりましょう」とのた

時折それとなく家族や友人、知人たちに己の自尊心を漏らす。ところが彼女、彼らは一様に「やっぱり電動自転車のお陰ね」と言って東彦の心底をおもんばかつてはくれない。それが一番の口惜しいことなのである。一言でいいから「若いのね、すごいわ」と言ってほしいのである。老残を晒す年齢になっても若さへの願望というのは断ち切れないらしい。それにしても、東彦は思う。あの虚弱児だった少年が傘寿目前にしても元気でペダルを踏み続けているのだ。七十年前に治療をしてくれた松川医師に改めて深く感謝をしたく思うのであった。

ところがこの東彦の「颯爽と寒風を切る」という誇らしさが無残に地に墜ちてしまったのである。これまで感じられなかった体力の衰え、さらに疾病の多さが原因である。それらを東彦は「七十九歳の障壁」と名付けた。

ある時、長男が「俺んちで松茸って食ったことねえんだよな」といい出した。確か大学二年生時の頃だったからこれこれ三十年ほど前のことであつた。その長男の言葉を継いで「フグも食ったことねえな」と次男も言いだした。最後に娘までもが「私、カニをおなか一杯たべたいなあ」と言い出す始末である。

東彦は腹の中で「中国産だけど松茸をどっさり、また、まう。予算の大半は東彦の財布からの支出であるから妻の無頓着は当然なのかもしれない。

師走に近いある日のことであつた。この年はカニパーティー三十周年を迎える記念の年にもあたっていたのである。ところが、その八日前に東彦は「風邪をひいた」という自覚症状があつた。いつも決まったパターンである。まず喉がイガイガし、ついで腫れっぽくなり、痛くなる。この時は全くの初期症状でイガイガだけであつた。掛かり付けの医院に行こうかと思つたが、以前に処方された風邪薬が八割ほど残っていたので「これを飲もう」と決めて医院行は見送った。二十三日のことである。四日間ほど服用した。

しかし、改善が全く見られない。それどころか症状は「痛みの段階」に進んでしまつていた。「これはやばいな」と、少し深刻になった。ちらりとコロナのことが思い浮かんだからである。しかし、東彦は発熱もなく、食欲もいつも通りなので「絶対にコロナではない」と確信していた。唇に目をやると二十七日である。「絶対に」と思いながらも「もしかしたら」という懸念がまたちらりと頭を掠める。

「大晦日の年取がだめになる」ということが重しのようにのしかかつて来た。同時にコロナの懸念が脳裏をちらりと走っていった。

実は九月の半ば過ぎ、東彦はコロナ騒動に巻き込まれた

のである。どちらかというと、勉強よりも遊びを主として面倒を見ている子ども三人のうち、一番年上の三年生になる京佳ちゃんがコロナに罹患してしまったのである。土曜日と日曜日が子どもたちを面倒見る日である。とその翌日の月曜日の午後九時過ぎ、京佳ちゃんの父親から「娘がコロナに罹患した」という連絡がきたのである。当然、東彦は濃厚接触者にあたる。直ぐに妻に話をしなければならぬ事態である。しかし、八時には就寝してしまう妻はすでに白河夜船の状況であった。熟睡している妻を無理矢理起こし、その上心配事を掛けるのは得策ではないと判断した東彦は、翌朝に報告することにした。元小学校教員であった妻は、今なお学校現場の断片的情報を耳にしている。コロナの感染状況が小学校現場にまで及び、この子どもたちを通じて家庭内感染も増えているという情報も彼女は掴んでいた。従って、妻は口酸っぱく「子どもたちの相手はしばらく控えるように」と東彦に伝えていた。しかし、東彦には京佳ちゃん、一年生の智花ちゃん、そして五歳児の恒星くんが可愛くてならない。智花ちゃんと恒星くんは遠くから東彦を見つけると勢いよく走って来て抱きついてくる。相手をしていないと否応なしに体を動かさざるを得ない。しかも彼女の言動にはいつも笑いをもらい、学びを得ている。東彦はこの子どもたちから数え切れないエネルギー、笑い、

そして希望さえもらっている。今の東彦にとり彼らは掛け値無しの宝物なのである。こんな宝物をそうそう簡単には離せない。東彦は妻の忠告を馬耳東風としていたのである。翌朝、恐る恐ると話した妻の反応は予想通りであった。しかし、それほどのきついお叱りはなかったのである。非全面的に東彦にあった。内心では相当な叱責を覚悟していた東彦である。ところが「だからあれだけ注意していたでしょう」のひとこと後、話は直ぐに対策の相談に移っていったのである。幸い夫婦の寝室及びトイレはそれぞれが二階にあり、東彦が自室でじつとしている限り接触はない。早速東彦の隔離生活は始まった。「久しぶりに読書三昧といこう」と思い定めた東彦ではあったが、実際は計画通りにはいくものではなかった。幸いコロナの症状は一切感じられなかった。そうすると「大丈夫、感染はしてない」と都合の良いように決めつけてしまう東彦であった。健康な体にはベッドに横たわる生活は無理である。一時間もすると飽きてくる。計画した読書も同じである。しかし、食欲だけは変わらなかった。そのことがコロナ罹患を否定する要因の一つにもなった。この夜の八時頃、親友の青山から電話があった。彼はせっかちな性分に違わず、いきなり「キットを試した？」と聞いて来た。東彦一瞬なんのことかと思った。「コロナのキット試薬をやってみれば罹患の

有無はすぐ分かる」というのである。しかも無料で検査を出来るという。朗報であった。身体に何の別状のない東彦は明日早速薬局へ出かけようと決めた。これは妻にもうれしいニュースであった。

東彦は翌朝、勇躍仕事場近くの薬局へ向かった。ご丁寧にマスクを二枚重ねにした。薬局には客は東彦一人であった。説明を受けて透明板で仕切られた個室に入って東彦は検査手順を慎重に踏んだ。唾液が入った試薬を薬剤師に手渡し、待つこと十分ほど。東彦の鼓動は次第に高まっていた。薬剤師から声が掛かった。

「マイナスです」

一瞬、喉が詰まった。

「あっ、あっ。ありがとうございます」

東彦は薬剤師に向かって深々と頭を下げた。

「よかったですね。しかし、これは必ずしも正確な検査ではありませんから。何か異状があったら必ず医師の診断かPCR検査を受けてくださいね」

薬剤師は透き通るような白い肌の顔の表情を変えずに応えた。

東彦はその後、三日ほど自宅で静かに過ごした。

この経験を重ねても現在の症状は風邪である。体温を測れば三十五度四分の平熱である。コロナの、インフルエン

ザの兆候は一切感じられなかった。また、パーティー直前になって一家の主が「コロナです。ごめんなさい。今年のカニパーティーは中止です」とはどうしても言えなかった。ズワイガニも例外なく年々値上がりをしてきていた。この年は「プーチン戦争」で物皆値上がりである。パーティー参加者は長女と長男夫婦、それに独身の次男プラス東彦夫婦で合計七人である。残り本数を数えながらのカニパーティーでは興が削がれる。また父親の権威も下がってしまう。そんなことで東彦は、多少無理をしてLL特大カニを今年も正味五キロを購入したのである。カニは既に一月ほど前に届き、二日前から自然解凍を施していた。心情的にも状況的にもパーティーの中止はできない状況に東彦は追い詰められてはいた。

東彦はコロナワクチンを既に五回接種済みであった。この接種五回が東彦には安心材料の一つでもあった。しかし、二、三日前に五回接種した知人がコロナに罹患したという知らせが届いていた。無症状に近い状態であるという。この無症状ということが気にかかってもきた。もし、コロナに罹患している状態でパーティーを行ったら最悪参加者全員が罹患してしまう。罹患せずとも七日間の隔離期間が必要となる。妻と長女を除けば全員仕事に就いている。謝罪だけでは済まされない。しかし、二十九日になって症状が

なんとなく緩和されてきたような気がしてきたのである。「もう一日様子をみるか」と東彦の気持ちは安きに流れると同時に、諦めもあったのである。

実はこの三日前から妻も風邪の症状を呈していた。妻はいつも「早めの〇〇〇」を服用して対処している。今回もこの〇〇が功を奏し、二日間で服用を止めている。もし夫である東彦がコロナ患者であれば妻は風邪ではなく、コロナ罹患者のはずである。コロナ罹患者が〇〇を二日間服用して治癒するはずがない。であるとすれば、妻は真正正銘の風邪患者であり、したがって東彦もコロナ患者ではないという三段論法が成立する。東彦は安堵した。そして処方薬が切れたのを契機に妻の〇〇を借用し、服用した。三十一日、起床すると症状が軽くなったような気がした。前日は、玄関の床やそれに続く門扉までのタイルを冷たい水を撒きながら力を込めて掃除した。それにいつもよりも増してお風呂の湯舟、タイルを磨き上げた。健康時以上の家事をしたのである。しかし、症状は悪化しない。これですらに自信を得た。

しかし、事態は甘くはなかった。コロナ罹患の葛藤が一段落した午前九時ごろであった。炬燵に入り、茶を飲みながら妻の長話に耳を傾けると、妻の言葉が意味を持たないすなわち言葉のまとまりになって東彦の耳に届かないので

遅さは抵抗力の低下でもある。七十代に向かうのと八十代に向かうのでは随分と差がある。何事も慎重に、ゆっくり、しっかりと歩んでいかなければ七十九歳の壁は超えられないぞ、と自分に強く言い聞かせた。

この一度高い体温に東彦は迷った。しかし、もはや黙秘して済む問題ではなかった。

「なんだか風邪がまだ治りきれない」

恐る恐る妻に話す。

「最近の風邪は長くかかるらしいわ」

妻はコロナの「コ」も浮かばないようだ。

「実はちよつとコロナのことが心配で」

一瞬妻の表情が停止した。

「あなた何言ってるのよ。そんなことあったらどうするのよ」

妻も咄嗟にカニパーティーのことが頭に浮かんだらしい。東彦は事情を説明し、ぎりぎりまで悩んだこと。しかし、隠したままでパーティーを開き、挙句、コロナに罹患させたら申し訳ない。遅きに失した感はあるが、正直に話して対処しようということになったのである、と。

妻は、普段には見られない迅速さで子どもたちに連絡を取った。長男が一番遠い横浜から来る。しかも、寿司としゃぶしゃぶ用牛肉を購入する役目になっていた。長女は

ある。雑音にしか聞こえてこないのである。しかも、その雑音が耳の中で反響し、千切れた音となって耳の中を勝手に動き回っているのである。これまで少しずつ聴力が落ちてきているのは事実であった。健康時の聴力より二、三割り低下している。しかも、この聴力が更に低下し、健康時の半分程に低下しているように思えるのである。ぞつとして来た。「そういえば三日前に外耳付近が強く痛んだな」ということを思い起こした。そこでこの難聴の症状は「風邪のせいに違いない」と思った。というより無理に思い込ませた。そこには「中耳炎が治つたら聴力も回復するはず」という願望が潜んでいた。

お昼近くのことである。妻が昼食にお粥を作ってくれた。米からじつくりと炊いたもので実に良い味が出ている。ゆつくりと噛みしめ、味わった。身体が温まるはずであった。しかし、その兆候は少しもない。食べ終わつた後五分もしたころ、ぞくつとからだが震えた。「おかしい、こんなはずがない」と思った。不安が一気に襲つて来た。東彦は妻の目を盗んでそつと体温計を取り、左脇下に挟んだ。三十六度四分であった。平熱が三十五度五分ぐらいなので一度ほど高いだけである。

それにしても治りが遅い、時間がかかり過ぎると思った。去年までは一週間もすれば治癒していたはずである。この五分ほどの所に住んでいる。彼女の夫が料理大好き人間で、それが高じて調理師免許まで取得している。この時点で彼はおせち料理を三大家族分調理中であった。

次男は八王子方面に住んでいる。この日は実家に一泊することになっていた。彼にはコロナ抗原検査キットを二人分購入して来るよう依頼。

ついで妻は市役所に電話。もう既に市役所も休暇に入っていたが、当番の職員がすぐに出て対応してくれた。抗原検査については東彦夫婦が考えた通りに進めること。もし、万一プラスならば、紹介する病院に電話をするようにという指示であった。受診は必要ないというのである。オンラインか電話で対応可能であるという。紹介した病院の担当の医師が適切なアドバイスや治療方針を指示してくれるという。東彦は思わず電話機に向かい深々と頭を下げてしまった。「市民税が高い」などと文句を言ったのが申し訳なく思った。

そうこうするうちに次男がキットを持参して帰宅、早速試薬をためすことにした。次男は大変優しい性格を持っており、説明書を見ながら懇切丁寧にやり方を教えてくれる。東彦夫婦は、息子の説明を聞きながらそれに忠実に従ってやるだけであった。このIT時代にアナログ人間である東彦たちにとっては次男たちのような若者の助けは本当にあ

りがたい。

このキットは綿棒のような器具で舌の裏側を何度かこすり、それを液体の入った丸細い容器に差し込んでかき混ぜる。その容器の液体を試薬の容器に垂らす。プラスであれば二本の線、マイナスであれば一本の線が表出する。「十五分ほど待つよ」

次男はコロナ罹患の恐れのある両親を少しも警戒していない。東彦も妻も線の表示に気がでならない。あつという間に一本の線が表れた。「マイナスだ」と、叫ぶ母親の声に「まだ時間がかかるから慌てないで」と、やはり冷静な次男である。

結果、線は一本表出のままであった。

ちようどこの頃、夫婦で近くの公園に犬の散歩に行つていた長男たちも帰宅、「よかったね」と喜んでくれた。

東彦は子どもたちや妻から「言うのが遅い」とか「もつと早く病院に行けばよかったのに」などと批判されると覚悟していたが、だれもそんな非難めいたことは口にしなかった。その配慮が東彦には何よりもうれしかった。

実は、医院への受診をしなければと思ったのは二十六日のことであった。この日は月曜日で、電話をしたのは早目の昼食後のことであった。東彦は持病などで定期検査を含め六カ所の病院、医院に通院している。その内、掛かり付

け医と呼べるのは二院である。SとA医院である。S医院

は総合的な治療や診察をしてもらい、通院歴も長い。A医院は自宅から徒歩五分ぐらいで比較的新しく開院した。近距離と言うこともあつて風邪などの症状の場合には診察を受けている。電話をしたのはこの二院である。しかし、この日の午後、A医院は癌患者中心の診察で、一般患者はお断りの状況であった。S医院に行くのにはバス、電車の乗り継ぎで億劫に思ってしまった。二十七日は両院とも午前のみ診察であった。水曜日は二院とも休診日でS医院は年末の休診に入り、翌二十九日の木曜日はA医院は診察をするに既に予約患者でいっぱいであった。東彦の判断、決心が遅かったのは事実であるが、しかし、彼なりに努力はしたのである。このことを家族に話したとて必ずしも理解を得るとは限らない。あるいは無用な誤解を生むだけかもしれない。そう理解した東彦は沈黙することにしたのである。

A医院の院長は、自身をお猿先生と称している。極めて腰が低く、対応も丁寧である。診察となると自身で診察室の扉を開けて患者を招き入れてくれる。最初にお猿先生に接したとき、東彦は腰を抜かすほど驚いた。まるでデパートかお得意にしている専門店にでも行ったような気持ちになった。医師にそういう態度を取られたら患者としては医師以上に丁重にならざるを得ない。診察も院長の態度同様

患者の話聞き、質問にもしっかりと答えてくれる。東彦の妻も東彦同様感心している。

S医院の院長と東彦は個人的なつながりがあつて懇意にしている。そのこともあつてぎつくばらんに相談ができ、安心できるマイドクターである。看護師たちも明るく雰囲気の良い医院である。

その他にK大学付属病院やF病院にも定期検査で年一〜二回通院している。総じてどの病院の医師も看護師も事務員も対応が丁寧である。K病院に白内障の手術で一晩入院したことがあつた。また、胃カメラの検査をしたこともあつた。その折の看護師の対応の優しさには涙がこぼれるほどであった。検査では励ましや慰めの言葉掛けのみならず掌で背中をさすってさえくれた。優しさは相手の心の扉を開くのだと言うことをしみじみと思い、そして学んだ。

少年のころ接した只野医師とは雲泥の違いである。大学や医療現場に入ってから患者の接し方の講義や指導があるのだろうか。いずれにしても患者にしてはこんなありがたいことはない。

六十九から七十歳にかけては特別の感慨もなくあつという間に過ぎた。別な言葉で表現するならばこの一年を軽やかな足取りで駆け上がったとも言える。ところがである、

七十九から八十歳に渡る階段はそう安易にはいかないようだ。まず、身体が病気のデパートのようなのだ。まずは恐ろしき大動脈瘤、次に腎臓結石、さらに緑内障、その上老人性乾燥肌、しかもこの師走の風邪罹患から生じたと思われる難聴である。

段々に耳の聞こえが衰えて来ていた。いずれ耳鼻科の受診をと思つていた矢先であった。風邪を引いて七日ほど経つた日である。右耳に猛烈な痛みが走つた。二日置いて今度は左耳である。ダイビングをしていると耳抜きができて、内耳に激しい痛みを感じることもある。その痛みそっくりなのである。耳抜きができない痛みとは耳の中の圧力と外側の水圧の差によつて生じる痛みである。鼻をつまんでフンとばかりに耳から空気を飛ばして（抜いて）やると大概治る。しかし、これで治らないと、猛烈な痛みで潜つていられなくなる。水圧がそれほどかからない水深まで浮上すると嘘のように痛みが消える。ダイビングでの耳抜きは毎度のことで当たり前になっていた。今回の風邪を引いての耳の痛みは初めてで、「悪化したら」と恐怖心に駆られたのは確かであった。しかし、直に痛みは消えたのでその恐怖心は直ぐに消えてしまった。ただ、聴力が健常時の半分ほどに低下してしまっているようで誠に不便であった。とにかく夫婦二人きりの生活の中で会話が成立しない

ことは、感情までがすれ違って行くようで先が不安でいっぱいになるのである。聴力の低下が始まったのはもう三年ほど前になる。これまで夫婦の会話は聞き返したり、声を大きくして話してもらうことで何とか過ごしてきた。テレビの視聴の際にはどうしても音量がたかくなる。二階に休んでいる妻からいくたびかクレームがいった。「近所にも聞こえるほどよ」という注意に、東彦は急ぎ補聴器を購入した。この補聴器はテレビ視聴以外では使用してこなかった。しかし、耳痛以後はできるだけ使用するように心がけているのである。だがこの補聴器は値段が安いこともあつてか、回りの音が全て高く聞こえ、かつ雑音めいた音も入り具合がよろしくない。しかし、素人考えで、この難聴は治らないような予感がし、先行きを考えると不安は膨れあがるばかりであつた。この難聴は七十代への扉にはなかつた障壁である。八十代障壁にこの難聴が加わるのである。

「手話」のシーンが東彦の眼前に浮かんでくる。哀しい風景である。

しかし、と東彦は考えた。この突然の難聴は本当に風邪がもたらしたもののなかと疑問に思えて来たのである。もしかしたら別な要因ではないかと思ひ始めたのである。東彦にはそれがコロナとしか考えつかないのである。東彦の友人や知人にはコロナに罹患した者が四人いる。そのうち

が予想される。また、後遺症も懸念される。現在でも相当数の人が後遺症に苦しんでいるという。それは後遺症対応の専門医の少なさも反映している訳のだが、ことは重大な問題である。

さらに東彦のように基礎疾患を抱えている患者、その中でも高齢者がこの変異株のコロナに罹患した場合を想像すると恐ろしくなる。今でさえ普通の風邪の罹患者の受診が断られる状況である。もし、コロナが大爆発したならば入院はおろか、病院の玄関先にすら泊まれない患者が出来ることが予想される。その現実の姿が中国の現状に見ることが出来る。

それにしてもコロナの第三波や第五派の流行期に見られたような緊張感や警戒感が現在少ないように見られる。ウイズコロナが先行している。東彦自身も「またか」というような安易な気持ちになっている。こんな無警戒や楽観的な状況は心配である。

目に見えないアメーバのようなコロナ菌がどこか日本の海岸の入り江、あるいは空港にゆつくりと、しかも確実に進入しつつあるとしたら、一億二千の民の運命は実に暗い。こんなことを考えると東彦の八十歳の障壁などは口の端にさえ乗らない問題である。

だが年寄りの心配は尽きない。「コロナ天誅論」である。

の二人はご丁寧にも二度も罹患している。さらに重症化した者、無症状の者が各一名、ほんの軽い風邪程度の者が一名であつた。コロナは罹患者が増えるにつれ変異し、症状も多様化し、悪化させているという。いわば変異する度に武器の重装化、高度化を図っているのである。誠に恐ろしい菌と言わざるを得ない。

一月八日(日)の東京のコロナ感染者は一万五千一二四人、死亡者は三十人である。東彦の住む神奈川県感染者は一万九十六人、死亡者は七人である。東邦大学の館田教授は「流行期に近づきつつある水準となっている。第八波のピークと重なる可能性もある」と警告をしている。それに加え、爆発的に感染者、死者数が増えていると言われている中国では「民族の大移動」とも言われる春節が間近である。この休み期間中には日本を訪れる中国人も相当数に上る。日本政府は急遽、水際対策を強化して感染者の入国を防ごうとしているが、今までの経緯を見ても網を抜けて入国する感染者は必ず出るのである。そうすれば、国内での感染拡大も極めて懸念される。しかも、識者によれば既に変異株の罹患者は発生していてその罹患者の入国も心配されているのだ。

国内で変異株が大流行したとするとどうなるのであろうか。その症状はつまびらかではないが、従来より重い症状環境破壊始め異常気象の招来、地球資源(海洋資源を含め)の乱掘、濫用、そして人口の爆発的增加。これらは地球そのものの存在を破壊、もしくは破壊する乱暴狼藉である。我慢に我慢を重ねて来た地球生命は遂に自らの生命の維持・防衛のために立ち上がった。手始めに地球環境の破壊の主因たる人口の抑制、ないしは削減である。現在の地球に対し、適正人口が何人であるかは東彦には定かではない。しかし、それは地球自身が知悉しているに違いない。

この地球人口削減の先兵がコロナなのではあるまいか。妄想、非科学的と言われるのは甘んじて受ける。だが、今や人類は縄文人のように大自然(地球)に対し謙虚であり、崇敬の念をもって自らを省みる最後の時であるのではないのか。「しかし、江戸時代にさえ返れない人間たち」である。まして、縄文時代に返ることは不可能であろう。そうになるとやはり地球からの鉄槌を受け、自給自足生活の時代に回帰する。その時の世界人口は現在の十分の一近い八億人。これでも地球の恩恵を受けてのことである。人類は謙虚に再起の道を歩むのである。

いや、もう一つ考えられる。今進行中のプーチン戦争(ウクライナへのロシア侵攻)である。いざれ迫い詰められたプーチンは、最後のあがきとして北朝鮮と同盟を結ぶ(さすがに中国はその誘いを拒絶)。何しろロシアと北朝

<コロナ異変>

鮮は陸続きである。しかも、強欲な領土拡張主義者であり、傲慢な権力者である。彼らは最後の手段として核爆弾のスイッチを押し、自らの命をも霧散させるが自国民をも道連れにし、あろうことか他国の民までも巻き込むのである。自爆の道である。これは八十歳近くの老人の妄想、幻想である。

人類は愚かではない、かもしれない。しかし、人間は愚か、ではある。これが大きな懸念である。